

## 調布市民のみなさん

このニュースは、毎月11日に行なっている「原発ゼロ」調布行動をめぐる情報を交流するものです。今日は、フクシマ原発事故（東日本大震災）から12年7か月となる9月11日（水）の「第130回行動」の報告と、11月11日（土）に予定している「第131回行動」のご案内をお届けします。  
(編集者)



## 颯爽と60人、3人の大学生も飛び入り！ 第130回「原発ゼロ」調布行動

今回の司会・進行は新婦人調布支部のみなさん。司会は松本加代子さん。スピーチ調整などの進行を矢野純子さん、記録を大松由紀子さん、今回も鈴木勝雄さんが音響機材の準備、写真は鈴木彰が担当しました。



- ◆ 司会(松本加代子さん)により開会メッセージ
- ◆ 最初に歌声から ♪「ふくろうのひとりごと」♪「人間の歌」
- ◆ 田村ゆう子さん(富士見町、市議) 地元と世論の反対を押し切って8月汚染水海洋放出が強行された。10月5日2回目の放出も行われた。他に安全な保管方法もある。海洋放出しなければ1千億円の保障金を出す必要もなくなる。調布市議会では海洋放出中止の決議案が否決されたが、これからも議会で声を上げていきたい。





◆ 鈴木幸雄さん(柴崎) 汚染水放出の怒りを持っている。2千億円を出して、これで漁業を止めろというのか。福井の裁判長が原発を止めた理由として2点あげている。①核の被害ははかり知れない、②地震の予測はできない。海岸線に並ぶ50あまりの原発は防衛問題でもある。原発をなくし、新しい日本を作っていこう。未来に向かって頑張ろう。

◆ 佐橋正文さん(つつじヶ丘) 汚染水はいくら薄めても安全であるとは言えない。生殖、DNAに影響を与えるものであり、どの位危険であるかがわかっていない汚染水をロンドン条約に違反して海に流している。来年再稼働される東海第2原発がもし事故を起こしたら、広島原爆の800発分。150キロしか離れていない調布は放射能に汚染され、生きていけない。廃炉しかない。六か所村が再稼働されたら、福島の間年22兆ベクレルの3倍の60兆ベクレルのトリチウムを1日で排出する。福島の1000倍以上のトリチウムを海と空に放出するとなんでもない計画です。原発をゼロにしない限り危険はなくなる。

◆ 歌 ♪「いとし子よ」



◆ 田島満子さん(多摩川) 調布で市議会議員をしていた飯野久子さんが府中で三多摩で初めて「9条の碑」を建てる運動をしているが、1200万円かかる。現在800万円集まったという。カンパに協力して成功させよう。

◆ 小野和子さん(染地) トリチウム汚染水放出、核戦争につながりかねないウクライナ戦争、岸田政権の軍事費拡大による国民生活の破壊、今は戦時下と言っても良い状況となっている。私たちは声を上げて戦争を止めていこう。子どもたちの未来を守るために。11月15日国際反戦デーに集まろう。

◆ 菊池公子さん(深大寺) 埼玉で自民党の「子ども虐待防止条例」が市民の反対で取りやめられた。8月15日の戦没者追悼式に参加した75歳の方が「現在の繁栄は英霊のおかげ」と言っただけで、赤紙1枚で徴兵され、選択肢なしに戦地に生かされ犠牲になった人びとを「英霊」と呼ぶのはおかしいのではないかと。戦争によって「殺された」と怒りをこめて語るべきだ。今こそ戦争の現実や事実をしっかりと見ることが必要だと思う。(民医連「いつでも元気」の記事より)





◆ 鈴木ひでよさん(国領) 樹木の会で広場の再開発に反対してきか、南ロータリーが1・5倍に拡大する工事が始まってしまった。工事が進むと、集会の場が取れるか危惧している。汚染水問題では、海洋放出以外に他の方法はなかったのか、様々なシュミレーションせずに押し切った。「さよなら原発」集会で小出裕章さんが、国が汚染水放出を強行した理由として、何千億円かかっても再処理工事が完成しなかったこと、青森六ヶ所村でプルトニウムを取り出して汚染水を放出する計画があること、福島放出が実績となって青森で放出できる根拠になること、等をあげておられた。

◆ 大松由紀子さん(柴崎) 年に5～6回位の例会で原発問題を映像で訴え、考える活動をしている。10月30日(月)「たんぼぼの綿毛の会」例会を菊野台地域福祉センターで13時半～15時半に行なうが、「不毛の地」・「市民チェルノブイリの教訓」と、「サイレント・フォールアウト」の予告編を上映する。観に来ていただきたい。

◆ 歌 ♪「ふるさとを汚したのは誰」



◆ 鈴木彰 フクシマ事故から12年7か月。130回目の集会に60人が集まった。原発は人間の未来を拓くものだと思われていたが、あの事故いらい、原発は人間の制御が効かないものだと分かり、国民も政府も原発はなくす方向に向かおうとがんばってきた。ところが今、岸田政権の政策転換により、汚染水放出、原発増設が強行されている。この行動の中でも最近の状況に苛立ち、怒りをあらわにする発言も増えている。あきらかに許されない政府の政策は、防衛費倍増の政策とともにやめさせなければならない。国民の批判は内閣支持率を低迷させていて、あと一步のところに来ているのだが、選挙になると多くの人が投票を投げ出し、結局、現政権を維持させてしまう。国民の本当の思い、願いを実現させるための議論を広げ、選挙では政治を変えるためにみんなでがんばろう。

◆ 途中で飛び入り参加した大学生3人が「そうだ！そうだ！」と声をあげ、最後の歌にも参加し、最後には指揮も執ってくれた。

◆ 歌 ♪「青い空は」



# 第131回「原発ゼロ」調布行動

日時：2023年11月11日(土)

10時半～11時半 於：調布駅前

今回は11月11日(土)。福島原発事故から152か月目、「調布行動」としては第131回目の行動です。11月の企画・進行・司会は、「原発のない暮らし@ちようふ」のみなさんが引き受けてくれます。

参加される方は、それぞれの思いをプラカードやミニカードに書いて集まりましょう。どんなことでもいいから「ひとこと」は言ってやろうというトークの準備もしてください。色んな人が、短くてもいいから「ひとこと」を！と願っています。

準備してきたのにトークができなかった場合、メモを編集部にいただければ、このメールでみなさんに伝えます。

\*コロナ・ウイルスへの感染防止の対策もまだ必要です(体調を崩された方は勇気をもって「自宅待機」を)。

\*小雨の場合はプラカードを持ってスタンディングなど、可能な範囲の行動に切り替えます。大雨の場合は、参加者各自でご判断を！

なお、11月以降の「窓口さん」は、以下のように申し合わせていますが、われこそはというグループはどうぞ名乗り出て、輪番に加わってください。

131～132回(11～12月)	原発のない暮らし@ちようふ
133～134回(1～2月)	調布合唱団有志
135～136回(3～4月)	アネモネ会

<特別付録> 今日の毎日新聞に載った興味深い記事を、こっそり貼り付けます。

●<毎日新聞 2023年10月11日>

「処理水」海洋放出 亀井静香氏の悲憤 脱原発しかない日本 新規建設「狂気の沙汰」 岸田政権はおしまい



記者のインタビューに答える元衆院議員の亀井静香氏

東京電力福島第1原発から2回目の「処理水」海洋放出が始まった。かつて与党の重鎮として原発を推進する立場だった亀井静香・元自民党政調会長(86)は、やるせなさを抱いていた。今や自然エネルギー分野で日本有数の実業家となり、「脱原発しかない」と力説する。政界から引退したと思いきや、時の政権にもエネルギー政策にも思いがあふれ出る。

「石原慎太郎が昔、ホーキング博士から聞いたと言っていました。高度な文明を持つ地球は自然の循環が壊されて100年で消滅してしまうと。それから既に50年。残り半分しかない」

ブラックホールを解明したことで知られる天才物理学者のエピソードから語り始めた亀井さん、ちょっと声のトーンが低い。今の福島をどう見ると尋ねたら、人生の陰影を感じさせる表情になってしまったのである。

原子炉の炉心が溶けるメルトダウンが起きた福島第1原発では今も、むき出しの核燃料に接触した汚染水が発生し続けている。高濃度の汚染水は多くの放射性物質を除去して「処理水」となる。これを海水で薄めて太平洋に流す2回目の海洋放出が5日から始まった。亀井さんの脳裏に、二つの光景が浮かんでいるようだ。

一つは、8歳で体験したヒロシマ。「いつか地球が消えてしまうにしても、原子雲の中で消えていく危険を感じます。ウクライナでロシアが核を使ってしまわないかと」

広島県山内北村（現庄原市）の国民学校3年だった1945年8月6日。夏休みに朝から登校し、イモ畑になった校庭で農作業をしていた。午前8時15分、南西の空に光が見えた。「ピカッと光った後、ドーンという地響き。キノコ形の原子雲。数日後、80キロ離れた広島市から被爆者たちが逃げてきた。全身が焼けただれた人たち。あの光景は忘れられません」

後で分かったが、家族も被爆していた。高等女学校の生徒だった姉は、救援活動で爆心地に通って「入市被爆」した。白血病に苦しみ、86年に亡くなった。俳人の出井知恵子さんである。こんな句を残している。〈白血球 測る晩夏の渴きかな〉

戦後、警察官僚を経て政治家になった亀井さんは、自民党で要職を歴任する。「原爆は許せないが、資源のない日本で、原子力の平和利用ならいいじゃないかという気持ちがあった」と振り返る。党の政策立案の責任者である政調会長を務めたのは99～2001年。「日本の原発は安全。大事故は起きない」という安全神話が浸透していた。

だが、11年3月11日以降、考えが一変する。当時、国民新党代表で民主党と連立政権を組んでいた亀井さんは、与党の一員として福島事故現場を視察した。防護服を着て中まで入り、あまりの惨状に言葉を失った。この時の周辺一帯の光景もまた、記憶に焼き付いている。

「異様な世界でした。人間が住めなくなった。家はある。牛がウロウロ歩いている。人はいない。こういう危険な原発は止めるしかないと感じかされた。エネルギー政策を間違ったら地球は死滅していくんだと」

事故の翌月、脱原発を議論する勉強会の呼びかけ人になった。全政党の有志が有識者らとエネルギーシフトを研究する「エネシフジャパン」だ。安倍晋三元首相の親友だった荒井広幸氏や、自民党の河野太郎氏らも呼びかけ人に加わり、与野党10党すべてから議員が参加した。すべての原発が止まった。日本は原子力に依存しない社会を目指すかに見えた。

「ところが、喉元過ぎれば熱さを忘れてしまう。いつの間にか再稼働だけでなく、新しい原発まで造ろうとしている。狂気の沙汰と言うしかない。日本は地震列島です。平和利用であれ、非常に危険な話ですよ」

脱原発派に転じた亀井さんは15年、盟友の石原氏と週刊朝日で対談した。「代替の再生エネルギーなどの知恵を出すのが政治家の務めだと思う。私は太陽光発電、バイオマスをやろうと思っている」と述べる亀井さんに、石原氏は冷淡だった。返答は「じゃあ、政治家辞めて、経営者になりなさいよ」。

この年、亀井さんは再生可能エネルギー発電を手がける会社「MJSソーラー」を設立する。17年の政界引退後は事業に専念し、18年には兵庫県丹波市のゴルフ場開発が頓挫した跡地でメガソーラー（出力39メガワット）建設に着手。関西電力と20年間の買い取り契約を結んだ。今では約12万枚の太陽光パネルが約1万1000世帯分の電力を供給している。

奈良県五條市に建設中の木質バイオマス発電所（出力10メガワット）も、来年3月に営業運転を始め、約2万世帯分の電力を供給する予定。奈良県で雇用を生み出すほか、燃料として地元産の間伐材や製材端材などを買い取ることで林業や木工業を支える狙いもある。

「一部の人だけ裕福になったアベノミクスで、日本企業は500兆円もの内部留保をため込んでいる。おれが総理ならそこに課税して、その財源で脱原発の対策をどんどんやっていく」。岸田文雄首相は就任時に「新しい資本主義」を掲げた。資産課税や富の再分配に乗り出すはずだった。「だが、岸田はやろうとしない」と腹に据えかねるのは、ともに広島県選出で、「核軍縮」がライフワークという岸田首相に期待していた部分があるからだ。

岸田首相の父、文武氏とは初当選同期で親しかったという。「ハトを守るタカ」を自任する亀井さんだけに、軽武装・経済優先路線のハトだったはずの自民党宏池会を率いる岸田首相への失望を隠さない。

引退して6年。今も政界が気になりますか？

「うーん、気になる。ときどき政治の虫がうずく。これは定めだね。業なんだな」

亀井さんはかねて、玉木雄一郎・国民民主党代表に連立政権入りを勧めていたが、今秋の内閣改造では実現しなかった。「野党側から自民党の中に入り込む『トロイの木馬』作戦だったが、うまくいかなかったな」と残念そうだ。「しかしまだ分らんよ。もう岸田政権はおしまいだ。1人あたりの国民所得が韓国に負ける水準まで落ち込み、地方の人たちは生活に苦しんでいる。間違いなく次の選挙で負ける。自公は過半数割れするから、別の形の連立になる」と力を込める。

そこで携帯電話を手にした。かけた相手はエネルギー政策通の中堅議員だ。「傘張り浪人がアドバイスするけど」と話し始めた。解散が近いぞと、何やらけしかけているようだ。

4日に小泉純一郎元首相と久々に会食した。01年の自民党総裁選で亀井さんは、小泉氏と政策協定を結んで本選を辞退したが、首相になった小泉氏に協定を無視された。05年の郵政解散・総選挙では離党した亀井さんの選挙区に刺客まで送られた。20年以上にわたる因縁を経て2人は今、「脱原発」という点で同じ方に向いている。

「原発をどんどん造るなんて、今の政治は死んじゃってるね」。来月で87歳。「おれはまだ生きてるのに、ただ彫像になるだけではつまらん」。もう一回、何かをやろうとしている。【奥村隆】